
キスの魔法

ユキ姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キスの魔法

【著者名】

コキ姫

N4282P

【あらすじ】

ふとした日常の出会いから正史と幸は恋に落ちる。キスで始りキスで終わる、たった三ヶ月の恋の話。年齢に関係なく恋をし、喜びや楽しみと共に辛く切ない気持ちを味わう幸であった。

三カ月の恋（前書き）

人は一人では生きていけない。きっと死ぬまで恋をし、愛を求め、幸せを探し続けるだらう。その中の1ページ。

三ヶ月の恋

今までどれだけの恋愛をしてきただろう?

誰かを好きになつて、喜んだり涙を流したり：
正史まさしと出会つて新たな恋が始つた。愛ではなく恋だったんだ。

会社帰りに同僚とよく行く喫茶店——いつものように、香りたつ美味しい「コーヒー」を飲みながら他愛もないお喋りをしていた。

「ねえ、今年の宇治の花火は幸さちのマンションから眺めよつよー！」 同僚の結子ゆうきが話しかける。

「眺めるつて言つより、上の方に上がる花火が少し見えるだけだよ。」

「それで充分。花火を肴に飲み会しよう。」

確かに私の家はマンションの7階でベランダが東南にあつて眺めもよく、ベランダからの風景は南には大きな公園がすぐ目の前に広がり、東には有名な東寺も見える。

少し離れたところに京都タワーも見えて、夜の1~2時になるとライトアップされていた灯がフツと消える。

眺めだけにどしまらず、部屋を吹き抜ける風も気持ちいい。

そんなマンションに一人暮らしをしているのだから自然と宴会場所になるはずだ。

こんな話をしていた時に、隣席で食事をしていた男子が声をかけてきた。

「君の家つてそんなに眺めいいの？」

「なんてナンパな奴——よく見ると、いつも通勤途中に田にする人だ

つた。

「俺、山下正史。君は今商事に勤めてる人でしょ？いつも通勤途中会つよね？」

一見られてる？」

「実はさ。話し聞こえてて、君の家って俺の家のすぐ近所！眺めいいの最高だよね！俺たちも交ぜてよ。その宴会。」

なんと早い展開。若さゆえだろうか？

いえいえ。

私も彼も40過ぎてる。

会社帰りだった事もあり、また出会い事があればねと話を遮り店を出て帰路についた。

結子と別れ、帰りのバスに乗ると山下正史も同乗していた。考えて見れば、家が近くなら一緒にバスに乗っていても当然だった。

バスを下りて、田の前にある居酒屋に立ち寄る事にした。よく行く店でマスターとも顔馴染で、一人で家に帰つても寂しいだけだし、少しの食事と少しのお酒と少しの会話を楽しみたかった。

正史も振り切れるかとも思つていた。

ところが、「よお、元氣かあ？」と、マスターが話かけたのは、私ではなく彼にだった。「変わりなく、元氣やでえ。店は繁盛してるか？」

なんと、二人は同級で昔からの友達だった。
私はビールを飲みながら彼らの話に耳を傾けていた。

正史は学生時代に随分ヤンチャをしてた事、仲間や関わった人には情が熱い事、今は独身だが子供がいて離れて暮らしてた事。そして

彼女がいる事。

「どうして、喫茶店で声かけてきたの？」

そんな私も今は独身だが、独立した娘もいて彼もいる。彼とのつきあいは6年は過ぎて。彼からもらった指輪もはめてる。ガードは固いはずだ。ただ私の恋愛にゴールはない。彼には家族がいて、必要な時にすぐに飛んで来てくれる事は期待できない。そんな私の心の中のちょっとした隙間に正史が入りこんでくるのを感じた。

「小池さんと山ちゃん、一人は知り合い？」カウンターに座った私達にマスターが話かけてきた。

事の経緯を話すと、

「人ととの出会いなんて、そんなもんやわあ。」とマスターは笑い飛ばしていた。

私は少し気持ちもほぐれお酒も手伝つて、今のこの時間を楽しもうと思つた。

お互い、彼氏彼女がいるなら…と安心感もあり、互いの人生感や考え方など話してゐうちに、私達は似てるんだと感じた。

離婚をするにも人それぞれ色々な事情があつて当然だ。

それでも人は一人でいられない。

愛されたいし、愛したい。

必要とされたいし必要な人でいたい。

自分が生きている実感がほしい。

きっと私達は兎と同じで、誰からも相手にされず構つてもうえなかつたら死んでしまう人種なのかもしれない。肉体が死ぬのではなく心が…。

店を出る時にメールを交換した。二十歳前後の若者がしてゐ事と、その倍も生きてる私達に何の違いもない。心はずつと年をとらないのだろうか？

何週間たつただろう。気付かない間に宇治の花火大会は終わつてた。彼をこの家に呼べなかつた事を少し悔やんだ。でも呼ぶ理由もなかつた。

九月に入つてメールが届いた。

「今晚、前に行つた居酒屋で飲まない？」

返事は「いいよ。」

6年続いてる彼とは週に1回余つくらいで、結婚を考えてる付き合いではないから、正史のメールにすぐ返事をした。

その夜に居酒屋で、

「マンションから公園がみたいなあ。小さい頃からずっと遊んでた。」

あの公園を見せてあげたいと思った。

下からの景色ではなく上から見渡す事で彼の心が癒されるのかもしない。

一人暮らしのマンションに夜遅く男の人を招き入れるのはやはり危険だ。

一応、常識はわきまえてるつもりだ。

その日は、たまたま娘が帰省しているせいもあり、私一人ではなかったため、「公園が見たい」と言う彼に、

「家にくるへ、娘もくるけど。」と声をかけていた。

「行く。」

陽気な彼と家で飲みなおす事にした。

案の定、娘は家にいた。
もしいなれば、外の景色も手伝つて事が
起きてたかもしない。

そうそう、この公園！あのこゝも！した山は登った
り回つてた。

彼の語り口調が、ヤンチャな子供時代を連想させた。

「公園のすぐ横の茶色い壁の家が、俺の実家。今は別に住んでるから少し離れてるけど。」

私は叫んだ。

目と鼻の先に

目と鼻の先ほどの距離はいたんだと思うと、和かここは住み始めで10年だから、どこかですれ違つてた事も有り得る。

娘がいたおかげで何も起こらず、それが少し寂しかったりもした。

帰り物わ、玄関のエアを一やせなうと握って閉めるには忍ひなく
レベーターに飛び乗つマッシュンのトまでついていった。

「俺いつきあいつ? つきあわない?」

まるで学生回十の会話。

私は自分の今の心のままに答えてた。

じあ…とひつて

1秒にも満たないキス。

その暖かい感触が私の心の琴線にふれた。

その時、私は恋に落ちた。

大きな波が私を飲み込んでいくように、喜んだり泣いたりの感情の波がここから始まる。
—キスの魔法—

私にとって、長くもありあつと言つ聞の三ヶ月の恋が始まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4282p/>

キスの魔法

2010年12月18日17時28分発行